

古代出雲の中心地であった松江市域の新しい歴史像とその舞台となった自然環境 - 『松江市史』通史編1「自然環境・原始・古代」の発刊 -

江戸時代には城下町が形成され、現在は県庁所在地となっているように、松江市は島根県の政治・経済・文化の中心地である。ただこれは何も江戸時代に始まったことではなく、奈良時代には意宇平野に出雲国府が置かれるなど、松江市域は古代出雲においても中心地である。

では、なぜ、どのようにして古代出雲の中心地となったのであろうか。このたび刊行する『松江市史』通史編1「自然環境・原始・古代」（以下「通史1」）では、その答えの一つが古墳時代にあることを次のように導き出している。



古墳時代前期の終わり頃の4世紀後半、大橋川の南側の意宇平野北部に廻田1号墳という大型の前方後円墳が突如として出現すると、その後、大橋川両岸には大型の方墳が築かれ、6世紀になると、意宇平野北部に位置する茶臼山西麓に、県内最大の山代二子塚古墳を含む山代・大庭古墳群が形成される。そして、奈良時代になるとその意宇平野に出雲国府が置かれ、政治・経済・文化の中心地となる・・・。

このように、簡単に流れを要約すると味気ないが、中心地としての「松江の出発点」が古墳時代にみてとれることなど、「通史1」では遺跡や文献史料など豊富に残された様々な資料をもとに、歴史研究の最前線にいる執筆陣が、松江市域における原始・古代の新しい歴史像を豊かに描いている。

また、さきほどの古墳の動向をみると、大橋川周辺に主要な古墳が集中している。これは宍道湖と中海を結ぶ大橋川が東西出雲の水上交通の要衝となっているからだとしている。

このように、宍道湖、中海、大橋川といった地形が大きく歴史を動かす要因となる。この歴史の舞台となる自然環境が、どのように胎動し形成され、人々がその自然環境とどう向き合ってきたかについても、「自然環境」という分野を設けて詳しく解説している。

なお、さきほど遺跡や文献史料が豊富に残ると述べたが、これは古代出雲が全国から注目される大きな要因の一つであることから、『出雲国風土記』と神仏・神話については、それぞれ一つの章を設けて特記している。

その『出雲国風土記』などから古代出雲といえば奈良時代のことを思い描く人が多いかもしれない。実際、平安時代の古代出雲についての書籍は少ないように思う。しかし、『松江市史』史料編3「古代・中世I」（平成25年3月刊行）で松江市域の古代出雲に関わる豊富な文献史料（617点）を網羅して収録しているが、そのうちの半数以上（65%近く）は平安時代の史料なのである。この豊富な平安時代の史料をもとに、二つの章を設けて、あまり知られていない平安時代の古代出雲像を描き出している。

つまり、「通史1」は古代出雲の中心地である松江市域の地形の成り立ちなどの自然環境や歴史的特徴を描き出した「松江らしさ」が満載の本なのである。

このように、全国から注目されて豊かな歴史像を描くことができるのも、遺跡や文献史料などが豊富に残されているからである。この「通史1」の編集業務に携わり、これら貴重な財産を未来に引き継ぐ必要性を改めて感じたところである。

(松江市歴史まちづくり部まちづくり文化財課史料編纂室主任 木下誠)